教育旅行（修学旅行）レポート

多感な中学生にとって教育旅行（修学旅行）は学生時代の一大イベントだ。楽しみでもあり、また不安でもある。非日常の場に身を置き、その土地ならではのものに触れ、見て、人と接することで視野が広がることもある。ここでは充実した教育旅行（修学旅行）を実施する２校の取り組みを紹介する。

東邦大学付属東邦中学校
新潟県上越市・十日町市
22年6月1～3日

北村章教諭

おいしい米がなぜできるのかを考えながら田植え体験

受け入れ先と密に連携
雪国の暮らし知る体験

千葉県習志野市に校舎を構える東邦大学付属東邦中学校（松本琢司校長）は、1925（大正14）年に額田豊・晉兄弟により帝国女子医学専門学校として創設。東邦大学が医学を中心とする理系総合大学であることから、同校もまた理系に強く、医学部への進学率が高い進学校だ。建学理念は「自然・生命・人間」の尊重」で、自然を畏敬し、生命を尊び、人間としての心の向上を目指す。

受験に勝つための知識詰め込み型の教育ではなく、「いろいろな人と会っていろいろな経験を積んで、周りをしっかり見られる頭の柔らかい人間を育成する」と北村章教諭。こうした教育方針から修学旅行を含めた校外学習には力を入れており、各年次で校外学習を行う。

1年次の校外学習は、富士山のふもとで自然に親しむ活動。2年次は、自然に加え、そこに住む人の生活にも触れる農家民泊。3年次は長崎で歴史学習を中心とする修学旅行を実施する。

今年度の2年次校外学習は、新潟県上越市・十日町市で展開されている体験プログラム「越後田舎体験」を6月1～3日の2泊3日で行った。コロナ禍でこれまで中止が続き、3年ぶりの実施。2年生の8クラス、男女約300人が参加した。

校外学習の目的は二つ。1点目は「平素と異なる生活環境について見聞を広め、自然や文化などに親しむとともに、背景にある生きるための知恵や工夫を知り、地域の農家が不足する事態に陥り、当日に農家民泊ができなかったが、結果的には同校として満足のいく校外学習を実現できた。

1日目は、現地入りして昼食をとった後、田植え体験。北村教諭は「だいたいの子はもう小学校時代に田植え体験をしているが、ここはお米がおいしい地域なので、おいしいお米ができる理由は何か探しながら田植え体験を行った」と話す。

田植えの後は「雪国の家と暮らし」や「雪国の森と暮らし」といった「雪国」をテーマにした探究プログラムをクラス別の8コースに分かれて実施。例えば、「雪国の家と暮らし」コースでは、松之山浦田集落で雪国ならではの家や周囲の工夫などを観察して回ったほか、地域の人々との茶話会などを行った。「雪がたいへん多い所なので、生徒たちとしては、雪をどうやって屋根から落とすかとか家の土台がとても高いとか、雪国のありかがとても新鮮に映ったようだ」と北村教諭。1日目は民宿に泊まった。

2日目は、1日目の探究プログラムの続き。宿泊先はホテル。

3日目の午前は、湯沢高原でのジップラインやマス釣り、信濃川でのラフティングなどアクティビティ体験。午後に帰着。

事後学習ではクラス内で班ごとに探究学習に関するまとめを行い、7月の期末テストが終わった後に学年全体での発表会を行った。「どの班も『高齢化が進んで本当に人がいない』と言っていた。しかし、なぜ受け入れてくれた地域の人は優しくて楽しそうなんだ、というところが印象に深かったようだ。最終的には、幸せというのはお金など経済的なものではなく、心の問題として捉えるべきではないかという結論が出てきた」と北村教諭。

2年次の校外学習は、農家民泊を軸とする。それがコロナの影響で実施できなかったが、今回の越後田舎体験では受け入れコーディネーターと密に打ち合わせを行ったことによりこれまでにない諸問題や地域の誇りに気づく」。2点目は「事前調査・研究を通して主体的、協働的に知識を得て、それを相互に交流することで、校外学習での体験の質の向上を目指す」。

上越市、十日町市を行き先とするのは今回が初めて。コロナの影響により全国各地で民泊の受け入れ農家が減少している中で、2年生全員の受け入れが可能という理由で決めた。ところが両市でも実施半年前に受け入れ

雪国特有の民家を観察した

五平餅を焼くいろりを囲んで

農家で飼っている鶏と触れ合う

信濃川でのラフティング

一宮市立北部中学校
千葉県いすみ市など
22年6月7～9日

加藤晋之校長

蟹井悦子教諭

東京近郊で漁村体験
本物の魚、漁船に感動

包丁を使い、アジの干物づくりに挑戦

愛知県の北西部、岐阜県境にある一宮市。古くから繊維産業で栄え、市内には「のこぎり屋根」の工場も残る。その一宮の中心部にある一宮市立北部中学校（加藤晋之校長）では、市内で最も歴史のある、1学年250人ほどの大規模校だ。生徒たちは「WE LOVE 北中」をスローガンに掲げ、ありのままの自分を受け入れて自分らしく、人のために行動することなどを目標に、日々の学習や活動に励んでいる。

北部中学校は19年に初めて千葉県での漁村体験を含む修学旅行を行ったが、コロナ禍により20年、21年は行き先を変更。22年は「2年生で高原でのキャンプ体験を行っており、山間部での自然体験に続くものとして3年生では海での自然体験をさせたい」（加藤校長）こと、井悦子教諭は振り返る。

旅行2日目、品川アクアパークとお台場や、オリンピックミュージアムと湯島天神など7クラスがそれぞれ決めたコースでの研修を行った後、北部中の一行は夕方にいすみ市に入った。

いすみでは男女別に12軒14棟の民宿に分宿。夕食後には、民宿の人との交流時間「ふれあいタイム」を設け、お互いの市について紹介し合った。質問タイムでは、生徒たちが進路学習を兼ねて事前に用意してきた「なぜ民宿をしているのか」「夏の忙しい時期はどうやって乗り切っているのか」といった質問に答えてもらった。中には、都会から移住して民宿を営んでいる人がいたため、生徒からは、「都会と田舎のそれぞれの良さを聞くことができて良かった」などの感想も出たという。

3日目はアジの開きづくり体験、漁港の水揚げ場や製氷室などの施設見学、漁船乗船体験を行った。生の魚を自分でさばくのは皆初体験。「丸ごとの魚を目にして、『ギャー』と大騒ぎだったが、加工場の方が手取り足取り教えてくれたので、楽しみながら完成させることができた」と蟹井教諭。漁船の乗船体験では大型の釣り船に分乗。晴天の下、外洋ならではの高い波や風を30分程度体験した。漁船の迫力に多くの生徒が歓喜し、「あと10周くらい乗りたい」「TDLより楽しい」との声がたくさん上がった。

クラス別の体験学習の合間には、偶然、サメの解体を間近で見ることができた。サメの頭を持たせてもらった生徒もおり、多くの生徒が、初めて目にする光景に大興奮だった。以前は廃棄されていたサメの肉を生かしたさつま揚げ風の新たな名物料理を開発、販売したことや、それらの事業はSDGsに関する取り組みであることなどを、市の職員から解説してもらった。加藤校長は、「学校で学んでも言葉ばかりがひとり歩きしがちなSDGsだが、実体験を伴う学びにより生徒たちも自分事としてとらえることができるようになった」と成果を語った。

「コロナ禍で不安定な状況の中、安心して旅行できるよう支援してくれた旅行会社はもちろん、いすみ市もさまざまな対策を取りながら市を挙げて受け入れをしてくれ、大変ありがたかった」と加藤校長。生徒たちもたくさんの人に支えられ実現した旅行だったことを実感。旅行後には民宿やいすみ市役所に向けた感謝のメッセージをまとめ、贈ったという。

「コロナ禍という制限の中で学校生活を送ってきた3年生が、この旅行を通して仲間とのつながりの温かさ、困難な状況でも支えてくれる周りの大人への信頼を強く感じることができた。さまざまな体験をしながら安全に帰ってこられたこの3日間は、生徒たちにとって、これからを力強く生きていく上でのヒントを得ることができた意義ある時間となった」と加藤校長は総括。蟹井教諭は「子どもにとって中学校の修学旅行は一生に1回。一生の思い出として強く残るような体験ができるものが理想的だ。そういった体験のできるいすみに、ぜひまた行きたい」と笑顔で語った。

漁船体験では大いに盛り上がった

漁港に揚がったたくさんの魚を前にする生徒たち

初めて見るサメの解体に、全員が釘づけに

民宿ごとに交流を深めたふれあいタイム

持続可能な社会の実現に向けたヒントを学ぶ

福島県・南会津 教育旅行 × 探求 × SDGs

SDGsの視点から、「持続可能な社会や地域づくりの実現、日常生活、自分たちの行動」について考える教育旅行プログラムを紹介します。

お薦め "スキー・スノーボード教室＆雪国生活体験"

福島県 南会津農村生活体験推進協議会
事務局　みなみあいづ観光（株式会社みなみあいづ）
〒967-0004 福島県南会津郡南会津町田島字後町甲3973-1　FAX 0241-62-7788　E-mail plan@minamiyama2.info
TEL 0241-62-2250　http://www.minamiaizu.co.jp/

教育旅行は 伊勢志摩へ

伊勢志摩には、豊かな自然、食材、歴史や文化など、地域ならではの資源が豊富に存在します。
それらを活かしたSDGsプログラムで、生徒のより良い学びを実現しませんか。

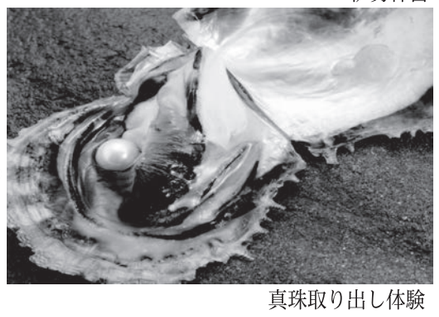
伊勢志摩が誇る歴史と自然

シーカヤック体験

市場入札体験

三重県 伊勢志摩においないさぁ 自然・歴史・文化から学ぶ、美し国環境学習 OINAISA

伊勢神宮


真珠取り出し体験

※伊勢志摩では新型コロナウイルス感染防止に地域全体で取り組んでおります。

伊勢志摩学生団体誘致委員会
（公益社団法人伊勢志摩観光コンベンション機構内）
TEL：0596-44-0800
MAIL：info@iseshima-kanko.jp

体験プログラム・宿泊施設のお問い合わせや資料請求などお気軽にご連絡ください。
その際は観光経済新聞をご覧になったことをお伝えください。
「伊勢志摩観光ナビ　教育旅行」で検索